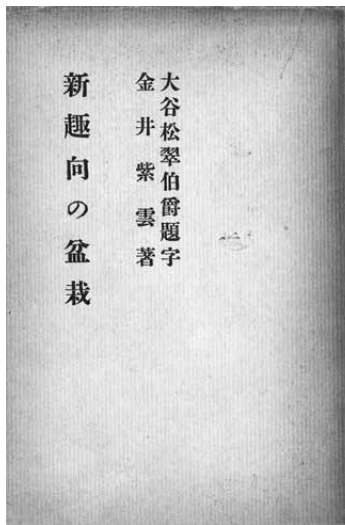


7月

【収藏品紹介】
金井紫雲著 『新趣向の盆栽』（実業之日本社、大正6年）

本書は、当時、中央新聞社の記者であった金井紫雲が、前著『盆栽の研究』（隆文館・大正3年、本誌2021年6・7月号参照）に続いて執筆したもので、書名のとおり、盆栽の「新趣向」に関する興味深い内容が記されています。

まず全体の構成は、「上篇」と「下篇」に分かれ、「上篇」の目次は「新しい盆栽」「新盆栽の種類」「新盆栽の観賞」「新盆栽の姿勢」「新盆栽と水石」「新盆栽と土壌」「新盆栽と肥料」「害虫類の駆除法」と続き、「下編」では「椿」をはじめに樹種ごと（計39種）の解説が記されています。こうした構成は、前著のそれをふまえたものとなっており、「下篇」



金井紫雲著『新趣向の盆栽』（実業之日本社、大正6年）

の樹種ごとの解説では、前著と同じく、樹の来歴や語源、故事伝説など、金井の言葉で言えば「趣味的方面の研究」が記されています。

このように本書は、基本的には「趣味の研究」という前著の方向性に即した内容となっておりますが、しかし、前著と大きく異なるのは、「上篇」の目次に示されているように、本書では「新しい盆栽」「新盆栽」（以下、「新盆栽」に統一）なるものが提唱されている点です。

この点について、本書の「自序」では、最近の「盆栽界の進歩発達」は著しく、盆栽の「範囲」が「拡大」されており、その顕著な例として「最近盆栽界の一角に起こった、雑木趣味の鼓吹」といった動向が挙げられています。その上で、「此の書は前に出しました『盆栽の研究』とは、全然離れて此の新しく盆栽たり得る植物を集め、其の趣味を研究し、盆栽としての養成法を述べたものです」と本書を紹介しています。当時の「雑木趣味」の詳細は不明ですが、金井は最近の盆栽

界の動向をふまえた上で「新盆栽」に注目したことがわかります。

この「新盆栽」については、「上篇」の「新しい盆栽」の項で、その考え方や定義が具体的に述べられています。そこで金井は、まず盆栽の定義を確認した上で、現在の盆栽について次のように述べています。わずか「一尺や一寸五寸の植物」を用いて、盆栽として「大自然の景象を写す」ためには、幹・枝・葉・花などの大きさや形状が「調和」していなければならない。しかし、「数の多い植物のごとく故、悉く其の資格を備へて居ない、此に於て「盆栽」と為し得べき植物」を選択する必要が起り、之れが為め、誰定むると謂ふこと無しに、自然自然に其の植物の範囲が定まつてしまつた。現今の盆栽界に流布されて居るものが、即ち自然に定まつた第一期の盆栽植物なのである」と。この「第一期の盆栽植物」の代表的なものとしては、松・梅・もみじ・楓・石榴などを挙げていますが、これに対して「新盆栽」とは「既に型に嵌つたものでなく、此の広い植物界から、自由に採て以て盆に栽え、培養の方法を研究した結果、立派に盆栽として眺め得らるゝ種類を指すのである」と定義してい

「新盆栽」の分類

区分	樹種
1 四季共通の常緑植物	アスナロ、テイカカズラ
2 春季花を觀賞する物	椿、スモモ、梨、サンザシ、レンギョウ、コブシ、モクレン、ツツジ、海棠、サンシュユ
3 夏季花を觀賞する物	クチナシ、エゴノキ、ノイバラ、テイカカズラ、スイカズラ、ジャスミン、マイカイ、カマツカ、ノウゼンカズラ、栗
4 秋季花を觀賞する物	モクセイ、紫丁木、サイフリボク
5 冬季花を觀賞する物	ビワ、茶、サザンカ、寒蘭
6 発芽前後の美を觀賞する物	桑、クコ、キブシ、カシワ、ナラ、ブナ
7 夏季緑葉を觀賞する物	菩提樹、トクサ、キブシ、桑、エゴノキ
8 果実を觀賞する物	スモモ、ノイバラ、リンゴ、梨、ナンテン、イチジク、イヌビワ、ビワ、クコ、クチナシ、栗、ノブドウ、サンザシ、レンギョウ、マユミ、ウメモドキ、ツルウメモドキ、ニシキギ、カマツカ、仏手柑
9 紅葉若しくは黄葉を觀賞する物	ウメモドキ、ニシキギ、カマツカ、ツルウメモドキ、マユミ、カシワ、ナラ、ブナ、ノブドウ、ツゲ、ハボタン
10 冬季落葉後の姿勢を觀賞する物	スモモ、桑、ノイバラ、菩提樹、梨、海棠、エゴノキ、ニレ、ソロノキ

では「新盆栽」とは、具体的にどのような樹種を指すのでしょうか。前著において金井は「盆栽の種類」について観賞の観点から10項目の区分を提唱していましたが、本書ではその区分を用いて、「新盆栽」の分類が行われています（表参照）。ここには、椿など、これまで盆栽（あるいは鉢植え）として愛好されていたと思われる樹種が見られますが、金井は「遠く徳川時代に於て、非常な流行を見ながら、明治維新以後は殆んど忘れられた盆栽樹木」についても、「確かに大正盆栽界に復活せしめねばならぬ立派なもの」があると述べています。つまり、「新

盆栽」には、新しい樹種の提唱のみならず、「大正盆栽界」で忘れられていた樹種の「復活」が企図されていたことがわかります。

このように金井が「新盆栽」を提唱する背景については、「自序」でも述べられているように、当時の「雑木趣味」をめぐる動向がありました。「上篇」の「新しい盆栽」の項の小項目「盆栽界の新運動」では、最近の盆栽界では「一部の盆栽家」によって「雑木趣味」を「鼓吹」する「新しい運動」が起こったこと、この「運動」は「限定された在来盆栽植物の範囲を拡大し、未だ先人の手を染めぬ樹木花卉に向つて培養を試み、新しい盆

栽趣味の普及に、多大の功があつた」と述べています。さらに、この「運動」によって「雑木盆栽」の範囲をめぐる議論が出現したことを紹介した上で、金井は「自分は敢へて「雑木盆栽」と謂はずして、「新しい盆栽」と謂ふ」と述べ、その意図は「雑木盆栽の総ても含まるゝものであるし、更に忘れられたる盆栽植物に向つて、新しい方面の趣味を研究し、新しい息を吹き込み、再び甦つたものも、亦此の中に数へ得るからである」としています。

以上からは、金井の「新盆栽」が、大正期の盆栽界で巻き起こった「雑木趣味」をめぐる「運動」の影響を受けたものであつたことが分かります。金井が「盆栽界の新運動」と呼んだその動向の中に本書もまた位置づけられるものと思われませんが、一方で、「忘れられたる盆栽植物」にも焦点を当てて、それらに「新しい息を吹き込み」、それによって盆栽の「範囲」の「拡大」を図ろうとする「新盆栽」という提唱のあり方に、本書（金井）の独自性が指摘できます。大正期の盆栽界の「新趣向」が知られる点で、本書は盆栽の近代史にとって極めて重要な資料と言えるでしょう。

（当館学芸員 林進一郎）